

加藤景範論―『葦山集』における小沢蘆庵との関わりを中心に―

金子理絵

はじめに

江戸時代の歌人・和学者である加藤景範（享保五（一七二〇）年五月四日生、寛政八（一七九六）年十月十日没、享年七七歳）は、大坂追手筋折屋町に居住し売薬を業とした。享保九（一七二四）年大坂尼崎町に設立された町人学問所懷徳堂の初代学主三宅石庵に書を、講師である五井蘭洲に和学を学んだ他、三代目学主三宅春楼、四代目学主中井竹山らに協力して懷徳堂の最盛期を築くなど、大坂を主に学問、著述活動の場とした人物である。特に、中井竹山が提唱、実践した懷徳堂の孝子顕彰運動において、竹山が著した「孝子義兵衛記録」を、和文『かはしまものがたり』として発表することを依頼されるなど、懷徳堂内においても、和文の才を高く評価されていた人物でもあった。自らもまた和歌、和学（証）での著作に励み、安永九（一七八〇）年（証）には「加藤景範入門誓盟録付姓名録」により和歌の宗家を興し、門人に教授したことが知られている。和歌の面での景範の活動は活発で、京の歌人有賀長因を大坂に招き活動を支援する、広く歌友を募り歌集『葦山集』

を撰集する、自身の歌集、撰集を大坂住吉社御文庫へ積極的に奉納するなど、多岐にわたる（証）。

しかし、これまでの景範に関する研究では、景範の歌人としての側面に注目したものが少なく、また歌壇における彼の歌学の位置づけを明らかにするような研究も行われてこなかった。歌人として歌集、歌学書を多数遺しているにも拘わらず、そのほとんどが翻刻研究されていないことにも、景範研究の現状が窺われる。

既述した懷徳堂の孝子顕彰運動に関わる『かはしまものがたり』の執筆や、五井蘭洲の『古今通』を書写、研究するなど、懷徳堂門人として儒学的な著作ばかりが注目されがちだった景範であるが、その文学活動の中でも特に注目したいのが、歌集、撰集の住吉大社への奉納である。「近世期において大名家の領地でもなく、また歌学を含め様々な家学の継承を誇る公家もない大坂の地にあつては、住吉社や天満宮の神官家の存在の意義は大きく、その神官家・神主家の人々によって和歌・連歌・俳諧・雅楽など高雅な遊芸が保持され運営され、彼らが指導の中心となり、神前がその提供の場となった」（証）とされるように、住吉社御文庫への奉納

は、著作の発表、保存の役割を担う「メディアの一種」^(注四)であった。景範が安永四（一七七五）年に「平安、江都、浪華」^(注五)などの歌人を集め撰集、奉納した歌集『蔵山集』の序文に、住吉大社奉納に対する景範の考えを窺い知ることができる。

やまと歌を撰ひ集めらるゝこと、呉竹のよゝにおほかた絶ぬ事にて、其道にあへるかきりは、ゑらひにいらんことを神にもねきかけて、ひとつふたつをたにとりにせられたらんには、いける世のめいほく、豊なる袂にあまり、我はと思へるかもれてらんには、芦たつの独をくるゝなけきにしつめるも有けらし、

いつのころよりか其事むすたれぬ、さはいへと、やことなきか際、いとさやうさくなるにいたりては、玉の台に長くと、まるのみにあらず、みかは水の流れと世にもかよひて、聞つきうつしも伝うめれば、ゑらひにもるゝ恨もなくて、をのつから玉の声代々にひゝくらんこそ、いとめてたけれ、

下つたといへと、ことのはの品くたれるけちめこそあらめ、心をたねの花の色は、おさくゝ立をくれんとやは思ふ、さて思ひをこらしよみ出せるも、花の鶯、水の蛙とまたく品をひとしくして、其をりを限りに、声残さゝらんは、いとあやなさわさなるかし、

つまり、住吉大社御文庫というメディアを通して、自分たち地下歌人の歌を後世に遺そうというのである。住吉大社御文庫とい

うメディアを用いて、晩年まで歌集、歌論書などの著作に精力的に励み続けた景範は、間違いなく近世大坂の有力な地下歌人であり、大坂の和歌、和学の発展に多大に尽力した人物であったと言える。「京大坂」と一括りに論じられることの多かつた近世期の歌壇研究において、大坂歌人の一人としての景範の和歌や歌学そのものを研究することには、大いに意義があると考ええる。

その景範は大坂にあって、京の歌人松井政豊や烏丸光栄に師事していた他、有賀長因、平安和歌四天王の一人澄月と懇意にあるなど、京の歌人とは縁が深い。その京歌人の中で特に注目したいのが、小沢蘆庵である。

蘆庵は、享保八（一七二三）年難波に生まれ、京に居住した歌人である。既述した澄月と同じく平安和歌四天王の一人に数えられ、その随一と称せられた。初めは京堂上歌壇の中心人物として名高い冷泉為村に師事したが、安永二（一七七三）年、冷泉門から破門された。破門後は一家の説を立て、『古今和歌集』を尊重して「ただことうた」を提唱し、歌名を高めていった。^(注七)

その蘆庵であるが、既述した景範撰集の歌集『蔵山集』には入集が三首のみと少ない。蘆庵と並ぶ平安和歌四天王である澄月や慈延はそれぞれ一二首、一〇首、伴蒿蹊も七首収載されている。ちなみに、『蔵山集（奉納写本）』の総歌数は二百六十六首、歌人は三十三人であるから、一人平均八・一首^(注八)である。さらに、蘆庵からは、『蔵山集』の入集歌について、景範への猛抗議があっ

た事実も確認されている。^(注七)

景範が『葦山集』を選集するにあたって、蘆庵にも詠歌の提出を依頼したのだが、いざ提出された蘆庵の歌の歌風に景範が違和感を覚え、無難な歌のみを集に入れたというのが、景範と蘆庵の確執の実態とされる。『葦山集』に対する蘆庵の抗議理由やその経緯については、浅田徹氏が詳しく述べているため本論では割愛するが、氏の論では、蘆庵の歌風が景範の意に合わなかったこと、蘆庵の猛抗議が景範やその周辺の歌友関係を軸になされたことなどの指摘に留まっており、実際に蘆庵の歌風の何が景範の意に沿わなかったのかについての考察は未だなされていない。^(注八)

そこで、本論では蘆庵の家集『六帖詠草』と景範が和歌の宗家を興した安永二年以降に成立したまとまった歌集である『奉納月次和歌』寛政二―五年と『六吟百首和歌』の掲載歌を比較し、景範と蘆庵の詠歌そのものの比較を行いたい。先の『葦山集』を巡る蘆庵の抗議は、後に『難葦山集』という著述により表面化し、歌壇を巻き込んだ論争に発展した。このことから、景範と蘆庵の歌風に明確な対立があったことは明らかである。比較をふまえ、『葦山集』を巡る両者の対立理由の歌論的側面を明らかにすることで、景範の歌論の一端を探り、今後の大坂歌壇研究の一助となることを期待する。

一、景範の歌風―堂上派和歌の影響

まず、『奉納月次和歌』寛政二―五年及び『六吟百首和歌』を基に、景範の歌風を検討してみたい。ここでは便宜的に、既述した歌集全てに景範と共に入集している歌人山中幸栄の和歌と景範のそれを比較してみる。

『奉納月次和歌』は寛政二年から五年にかけて、景範が仲間と共に詠じ、住吉社に奉納した月次題詠歌集である。詠者は年ごと一部変更があるが、同じく寛政四年に住吉社へ奉納された『六吟百首和歌』も含め、景範と共にその全ての歌集に入集している歌人が山中幸栄である。幸栄についての伝は未詳だが、以上の歌集入集ぶりから、恐らく景範と非常に親しい間柄であったことが推察される。今後の大坂歌壇研究において来歴が明らかになることを期待したい。

特に、景範と幸栄の和歌は、結句が一致しているものが多い。また、景範は享和二(一八〇二)年刊行の歌論書『国雅管窺』において、結句について以下のように述べている。^(注九)

結句も大かたてにはにてとむるがよし。実字にてとむればつまりて聞、■利口めきて連歌の句調になるをきらふ也。されど実字にてよきも多し。よしあしをあらなく次にしるす。

『国雅管窺』ではこの後、結句に用いられる語として良いものを三五例、悪いものを三三例載せている。初句については「初

五字にたやすくすはらぬ詞」として九例載せるに留まっており、また「結句其外にもきらふ詞」として四二例を載せるなど、景範が結句に並々ならぬ関心をはらって歌作しようとしていたことがわかる。このため、ここでは結句の一致に注目してみたい。

以下に、景範と幸栄の同題歌で結句が一致した和歌の用例を載せる。^{注二}①から⑩までの通し番号は筆者により付すものとし、通し番号以下歌題、景範詠歌、幸栄詠歌、引用元を記す。⑥「名所網代」題詠歌に関しては、結句に「宇治の河かぜ」「宇治の河なみ」と微妙に差異があるが、類似と判断してここに載せることとする。

①雪間若菜

景範 むら消の雲まも深き霜影の野辺かき分けて若菜をぞ摘
幸栄 はるばると萩のやけ原かき分けて雪間にもゆる若菜
をぞ摘

〔奉納月次和歌〕寛政二年

②庭春雨

景範 一入の色はいそがぬ庭の木の下くさ青む春雨のころ
幸栄 霞するみぎりの松の一しほの色そへけりなはるさめ
の比

〔奉納月次和歌〕寛政二年

③河五月雨

景範 河づらは船影たえて淀野にぞ棹さしかよふさみだれ
のころ

幸栄 ふねままにみかさ増りて大井川河音たかしさみだれ
の比

〔奉納月次和歌〕寛政二年

④七夕橋

景範 たなばたのわたりはてなばかれ絶て別れとどめよ鵲
のはし

幸栄 かけそめてたえぬ契りのためしかもあまの河原のか
ささぎの橋

〔奉納月次和歌〕寛政二年

⑤初雁

景範 みやこにはまだき立ぬる秋風にいかでおくれし初雁
のころ

幸栄 秋ながき霧にまぎれてそことなく田面におつる初雁
の声

〔奉納月次和歌〕寛政二年

⑥名所網代

景範 かがりびの光に見てもあじろもる袖寒げなる宇治の
河かぜ

幸栄 山風に網代のががりむすぶふの影さへこほる宇治の
河なみ

〔奉納月次和歌〕寛政二年

⑦籬卯花

景範 春はただすみれつはなのませ垣もかたぶくばかりに
さける卯のはな
幸栄 をく露もけさよりは猶色はへてくるるかきねにさけ
る卯花

〔奉納月次和歌〕寛政三年)

⑧ 瀬鶴河

景範 鶴飼舟波のいく瀬にふす鮎もさぞさはぐらんかがり
火のかげ
幸栄 はやき瀬をくだす鶴舟の大井川なみ間にたえぬ篝火
のかげ

〔奉納月次和歌〕寛政三年)

⑨ 煙辺閑

景範 ふくる夜もねぶりわするる世がたりに□をすすむる
埋火のもと
幸栄 すさまじと思ふばかりの月もみずかたりあはする埋
火のもと

〔奉納月次和歌〕寛政三年)

⑩ 鶯馴

景範 打はぶきなくさまをさへみる窓に心もをかでなるる鶯
幸栄 うつろはん色をうしとや花もなき竹をねぐらになる
る鶯

〔奉納月次和歌〕寛政五年)

以上一〇件の用例に、同題詠歌の結句の一致が見られた。内訳は『奉納月次和歌』寛政二年に六首、寛政三年に三首、寛政五年に一首である。『奉納月次和歌』寛政四年及び『六吟百首和歌』には、同題歌で結句の一致した歌は見られなかった。

その中でも、『奉納月次和歌』寛政二年の結句の一致状況には注目したい。結句が一致した用例件数は全三六題中六題だが、共詠している他の歌人(式高道寧、上野有成)らに、同題歌での結句の一致は見られないからである。

それでは、一致した結句は各歌題の題詠歌に詠み込まれる句として一般的なものののだろうか。これらの一致した結句が、他の歌人の歌集ではどのように詠まれているのかを探るため、『新編国歌大観』CD-ROM版(角川書店)を利用し、①から⑩に挙げたものと同じ結句を持つ和歌の用例を検索した。検索結果はそれぞれ以下の表の通りである。表b、c中の「堂上派歌集」は、冷泉為村の『為村集』、武者小路実陰の『芳雲集』(編集は実陰の孫である実岳)などの堂上派歌集を、「その他の歌集」は本居宣長の『鈴屋集』、加藤千蔭の『うけらが花』などの鈴屋門、江戸派といった堂上派以外の歌集を指す。

この表から、『新明題和歌集』『芳雲集』『為村集』などに共通の結句が多いことがわかる。一方で、小沢蘆庵『六帖詠草』や本居宣長『鈴屋集』には共通した結句が少ない。古歌全体から検索した場合の各結句の用例件数自体の多少もあるが、表b、c全体

を俯瞰してみると、堂上派の歌集に用例件数が多いこともわかる。加藤景範研究における先行論では、景範は「二条派の流れを汲む旧派の系統に属してゐる」^(注一四)、「堂上派の地下歌人として、(略)無難な歌風を旨とした」^(注一五)などとされ、近世大坂の二条派の地下歌人として認識されている。表b、cを見ても、堂上派歌人の類題和歌集である『新明題和歌集』や景範の師澄月が和歌を学んだ武者小路実岳が整理編集した歌集『芳雲集』、明和八(二七七二)年に景範と歌の贈答があり、当時の堂上歌壇の中心にあつた冷泉為村の家集『為村集』などに、結句の一致が特に集中している。このことから、景範の歌作が堂上派(特に二条派)の和歌に影響を受けているだろうことが、和歌の実作からも確認できた。

表 a 各結句・歌題の用例件数

結句	件数
若菜をぞ摘	105
春雨の比	27
五月雨のころ	987
鶺鴒の橋	228
初雁のこゑ	397
宇治の河風	77
さける卯花	197
篝火のかけ	159
埋火のもと	74
なるる鶯	6

歌題	件数
雪間若菜	3
庭春雨	15
河五月雨	66
七夕	62
初雁	584
名所網代	4
籬卯花	22
瀬鶺鴒河	15
煙辺閑	0
鶯馴	7

表 b 同題・類似題での結句の一致した用例件数

結句	堂上派歌集			
	新明題集	芳雲集	為村集	霞閑集
若菜をぞ摘			2	
春雨の比		2		1
五月雨のころ	17	10	2	5
鶺鴒の橋	3			
初雁のこゑ	10	5	1	3
宇治の河風		1		
さける卯花	3	2		1
篝火のかけ				
埋火のもと				
なるる鶯				

結句	その他の歌集			
	鈴屋集	六帖詠草	うけらが花	琴後集
若菜をぞ摘				
春雨の比			2	
五月雨のころ	6		1	
鶺鴒の橋				
初雁のこゑ			1	
宇治の河風				
さける卯花				
篝火のかけ				
埋火のもと				
なるる鶯				

表 c 同題・類似題で、結句及び歌語が一致した用例件数

結句	堂上派歌集			
	新明題集	芳雲集	為村集	霞関集
若菜をぞ摘				
春雨の比				
五月雨のころ				
鶺鴒の橋			1	
初雁のこゑ	4	2		
宇治の河風				
さける卯花	1		2	
篝火のかけ	3		14	
埋火のもと				
なるる鶯				

結句	その他の歌集			
	鈴屋集	六帖詠草	うけらが花	琴後集
若菜をぞ摘				
春雨の比				
五月雨のころ				
鶺鴒の橋				
初雁のこゑ				
宇治の河風				
さける卯花				
篝火のかけ	1		2	1
埋火のもと				
なるる鶯				

二、同題・類似題詠歌での小沢蘆庵との比較

前節において、『奉納月次和歌』における結句の一致から、景範の和歌が堂上派和歌の詠みぶりを踏襲していたらしいことがわかった。

ここでは、景範『奉納月次和歌』寛政二―五年及び『六吟百首和歌』と蘆庵『六帖詠草』の所収歌の中から、同題・類似題下の題詠歌を比較する。同じ歌題の下で、両者がどのような素材や歌作の視点を選択し、どのように詠み込んでいるのかを比較しながら、歌語の用いられ方なども視野に入れて考察する。

『新編国歌大観』CD-ROM版で検索したところ、『奉納月次和歌』寛政二年―五年及び『六吟百首』と『六帖詠草』の歌題の中で、共通している歌題は一九題であった。

今回はその中から景範と蘆庵の共通点、相違点が最もよく表れたものとして、『雪中若菜』(『奉納月次和歌』寛政二年)と『雪間若菜』(『六帖詠草』)、『瀬鶺鴒河』(『奉納月次和歌』寛政三年)と『鶺鴒川』(『六帖詠草』)の和歌を比較する。

まず、『雪中若菜』『雪間若菜』題詠歌を以下に引用する。(注²⁶)各詠者、歌題、和歌の順に記載する。

〔景範〕

雪中若菜

むら消の雪間も深き霜朝の野辺かき分けて若菜をぞ摘む

〔蘆庵〕

雪間若菜

摘むことのかたみの若菜それをさへ惜しとや雪の降りかくすらむ

『歌ことば歌枕大辞典』〔角川書店〕「若菜」項には、次のようにある。

新春に摘む菜。特に正月初子の日や七日の白馬の節会に食する若菜は、正月の景物として盛んに詠まれた。(略)「万世」に象徴される長寿祈願の趣旨を詠むものが多い。また初春の冬の名残から雪を、春の深まる予感から霞や花を詠み込む作品もあり、以上の要素が基本的な枠組みを形成して継承される。

蘆庵詠歌は、「かたみ」に摘んだ若菜を入れる「筐」と、雪に阻まれて若菜を摘むことの難しい意の「難み」をかけ、更に「それをさへ惜しとや雪の降りかくすらむ」という表現で「ただでさえ摘むことの難しい若菜がいつそう摘みにくくなっている」と詠む。

一方景範詠歌は、「二面に積もった雪も、解けはじめると斑になつていく」「積雪の消えている所」^(注一七)の意の「むら消」「雪間」という表現を用いながらも、「むら消の雪間」でさえも「深き」ものであり、その中に咲く若菜を摘む情景が「深き」雪に覆われた「霜朝」であると詠む。そうすることで「野辺かき分けて若菜をぞ摘」ことの難しさを表しているとも言え、両歌とも雪の中で若菜を摘むことの難しさを詠んでいるという大意は変わらない。

「若菜」題では、既述した「雪」や「花」「霞」などを詠み込む

場合が多く、それぞれの「若菜」題詠歌の上でも共通の認識となっている。また『新編国歌大観』CD-ROM版で検索したところ、「摘む」という語もともに用いられることが多い。しかし、「若菜」とともに詠まれている語の古歌用例数は、景範詠歌にある「雪間」

六九件、「霜」二二件、「野辺」二三六件、蘆庵詠歌にある「かたみ」九〇件(但し確実に「筐」「難み」の意ととれるものは未見、「形見」の意が大多数)、「隠す」三件、「惜し」五件であり、景範詠歌の方が一般的な和歌表現を踏襲していると言える。

次に、「瀬鶉河」「鶉川」題詠歌を以下に引用する。

〔景範〕

瀬鶉河

鶉飼舟波のいくせにふす鮎もさぞさはぐらん篝火の陰

〔蘆庵〕

鶉川

夕月の入りがたちかき山陰はやみもまちあへず鶉舟さすなり
『歌ことば歌枕大辞典』「鶉川」項には、次のようにある。

歌には「鶉川」よりも「鶉舟」や「鶉飼舟」を詠み込む例が多く、五月闇での篝火の明るさや、篝火を螢にまたその逆にとえたり、短夜とともに詠んだり、鶉飼が殺生戒を犯すことを「苦し」「あはれ」と詠んだ。

更に、同辞典で景範詠歌に詠み込まれた「鮎」については、鮎は鶉飼により漁られるため、「大井川鶉船にともすかがり

火のかかる世にあふ鮎ぞはかなき（永久百首・一八九・大進）のように、院政期頃からその哀れを詠むケースも見えはじめ、「つな」「なは」「やな」などとともに詠まれるようになった。鵜飼を意味する歌語・歌題「鵜川」の作例も鮎を多く詠み同題の「桂川くだりもやらぬ鵜舟かなこの瀬にのみや鮎子さばしる」（六百番歌合・二二八・経家）などがある。

景範詠歌では、「鵜河」題に典型的な「鵜飼舟」「鮎」「篝火」の語を詠み込んでおり、鵜飼舟の篝火に驚き騒ぐ「波のいくせにふす鮎」を詠む。一方で蘆庵詠歌は、「いささか気の早い鵜匠たちの心情を巧みに詠じている」^{（五二八）}のであり、鵜飼側の視点に依っている。しかも、鵜飼が殺生を犯すことに対する懺悔や「哀れ」の視点からではなく、鵜飼漁のありのままの姿を詠むことに重点を置いた視点を持っている。

このように、同題・類似題でも、両歌は歌作に対する着眼点が違ふということがわかる。景範詠歌の方がやや典型的、伝統的な歌語、着眼点を持った歌作をしていると言える。ここに、第一節で述べたような伝統的な堂上派和歌の影響が表れていると捉えられる。

『奉納月次和歌』寛政二年―寛政五年及び『六吟百首和歌』と『六帖詠草』での同題・類似題一九題の内、共通の歌語を持つ歌が含まれるものは三題のみであった。第一節の表を鑑みても、景範と

蘆庵とでは歌作の視点に距離があることが窺われる。

三、景範と蘆庵の「桜」観

次に、特定の素材が詠まれた和歌を比較することで、景範と蘆庵の歌作の視点の差異をより明確にしていきたい。今回は『葦山集』に入集した蘆庵の和歌三首の内に用例があり、かつ『六帖詠草』において蘆庵が「花」の中で最も良いものとする「桜」を取り上げる^{（五九七）}。

まずは、『奉納月次和歌』において景範が詠んだ「桜」の歌を見ていこう。『奉納月次和歌』で「桜」が詠み込まれた歌は以下の三首である。それぞれ歌題、和歌、引用元の順に記す。

山家花

あけて見む落にし花の都人山さくら戸の陰もとふやと

（『奉納月次和歌』寛政二年）

谷余花

桜花世に知る人も夏かけてあたら色香に谷のむもれ木

（『奉納月次和歌』寛政二年）

山寒花遅

冬にこもる桜に春を知らせじと花やねたみてさゆる山風

（『奉納月次和歌』寛政三年）

一首目「山家花」題歌における「山さくら戸」は「山桜の板

戸」のことであり、厳密に「桜」の花を詠んだものではないた
 めここでは論じない。二首目「谷余花」題歌、三首目「山寒花遅」
 題歌は「桜」の花を詠み込んでいるが、「谷余花」題歌では「夏
 かけてあたら色香に谷のむもれ木」と詠んでおり、むしろ「谷の
 むもれ木」に焦点が当てられた歌となっている。「むもれ木」と
 は「長期間、水底や谷底、土中に埋もれて変質した木」のことで、
 和歌では「春や、花と対比して詠じられることが多い」。歌題「谷
 余花」に沿って桜の花と「むもれ木」を対比させつつ、桜花を知
 る世の中の人も夏が来ると「あたら色香」により「谷のむもれ木」
 に気が付くという様を詠んでいる。また、「山寒花遅」題歌では、
 歌の焦点は「さゆる山風」にあり、「さゆる山風」が吹き荒れる
 要因を、他の花たちが春に咲く「桜」を妬んでいるためであると
 擬人的に表現している。いずれの歌も「桜」と「春」が密接に関わっ
 ており、景範は「春」の花として「桜」を認識していたと思われる。
 しかし、「桜」を焦点に据えて詠じた歌というよりは、春に咲く「桜」
 の花を用いて、夏の到来により人々の意識に上る「谷のむもれ木」
 や、冬に吹き荒れる「さゆる山風」を強調している歌と言える。
 次に、『六帖詠草』において蘆庵が「桜」を詠み込んだ歌を見
 ていきたい。今回は、蘆庵が「桜」を詠み込んだ和歌四六首の内
 以下の三首を取り上げる。(注三)

花の歌

山桜散る木の元は谷川の音も風に聞きなされつる

落花

散るが上に散り行く見れば桜花惜しむ身のみや又残らまし

夕落花

よしやふけ暮なばなげの桜花散るをだに見む春の夕風

一首目「花の歌」題歌で「谷川」、三首目「夕落花」題歌で「風」と、景範の「谷余花」題歌、「山寒花遅」題歌で詠まれた「谷」「山風」と類似した語が詠み込まれてはいるが、「桜」を詠んだ蘆庵の歌の最たる特徴は「桜」の花が「散る」点に主眼が置かれている点である。「花の歌」題歌では「谷川の音」を「嵐」と表現し、「桜」の花を散らすものとして詠んでいる他、「落花」題歌では「散るが上に散り行く」、「夕落花」題歌では「散るをだに見む春の夕風」に「よしやふけ」と呼びかける表現を用いるなど、「桜」が「散る」という情景を詠んでいる。『六帖詠草』で「桜」が詠み込まれた四六首の和歌の内、「散る」という語がともに詠まれた歌は一〇首、「桜」を散らす「風」がともに詠まれた歌は五首あり、全体の約三分の一を占める。

『歌ことば歌枕大辞典』「桜」項では、「桜」の花が「散る」とこ
 とに關して次のように述べられている。

「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」(春下・八四・友則)、「残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中は
 ての憂ければ」(同・七一・よみびとしらず)。ここには桜の
 特色を「散る」すがたに見、移ろいのすみやかさを悲しみ、

あるいは世への執着をはなれたいさぎよさを感じ取る方向がある。こうして桜は春の大きな歌材となり、その表現を競う場を拓いていった。

蘆庵にとつての「桜」は、まさに「桜の特色を『散る』すがた」に見るものとして認識されているのである。ここに、景範との「桜」観の違いが見られる。景範は「桜」を春という季節と密接に関わらせて捉え、季節の移り変わりやそれによる風物を強調するため、役割を持たせていた。一方で蘆庵は、「桜」が散る情景を中心に、桜を散らす風の音のようである「谷川の音」を「聞く」、散る様子を持たず「見る」、「惜しむ」など、桜が散る悲しみを叙情的に詠む姿勢が強い。蘆庵に比べ、景範の歌はそうした哀惜から離れて景物を叙景的に詠む姿勢が出ているとも言える。

四、蔵山集をめぐる景範と蘆庵の齟齬

第一節の表で見た結句の一致状況の中で、景範と多く結句が一致していた冷泉為村『為村集』と武者小路実陰『芳雲集』の和歌で、「桜」が詠まれたものは一〇九首である。その内、「散る」「落つ」「風」が詠みこまれたものは九首（『為村集』二首、『芳雲集』七首）だった。以下に、詠みぶりの特徴が出ているものを挙げる。

折花

さそひ行く風もこそあれ桜花折るにまかせて春の山もり

野雉

桜がりわくるかた野の立つきじのつばさにちるや花のしら雪

（為村集）

八重桜

うつろはで日数重ねよ八重桜一重の花はあだに散るとも

（為村集）

嵐山の桜を

さもあらばあれな嵐の山桜散るとも花に身をなしてみん

（芳雲集、他五首）

これらは、「ちるや白ゆき」と桜の花が散る姿を雪に喩えたり、「あだに散るとも」「八重桜」は移ろわずに日を重ねよと呼び掛けたりと、いずれの和歌も桜の花が散る悲しみを詠んだ歌というより、むしろその美しさを喩えたり積極的に肯定したりする向きが感じられる歌である。

また、表で挙げた「その他歌集」では、『鈴屋集』二二首、『うけらが花』一四首、『琴後集』一一首と、それぞれ教的に『為村集』『芳雲集』を上回っている。こうした「桜」の詠みぶりを見ても、第一節で確認したような堂上派歌風の影響が見られる景範と、それから反した蘆庵との差異が見受けられる。

ところで、『蔵山集』に入集した蘆庵の「桜」の歌は、

花未飽

わけのこす野山をおほみさくら花こころゆくまでみる春ぞなき
 というものであった。この歌には、既述したような、「桜」が散
 る情景を詠む蘆庵の歌風を見出すことはできない。また、『六帖
 詠草』で「桜」題（結題含む）と同数見られた「落花」題（結題
 含む）は、『蔵山集』では二題（「落花」「庭上落花」）あるが、い
 ずれも蘆庵作ではない。蘆庵が景範に依頼され、『蔵山集』のた
 めに当初提出した和歌がどのようなものであったのかはわからな
 いが、少なくとも、実際に景範が『蔵山集』に入れた蘆庵の歌は、
 明らかに蘆庵の本来の歌風とは異なる歌だったのである。ちなみ
 に、『蔵山集』に入集している「桜」の歌は、蘆庵の他には、

待花

成章

今いくかまたれて猶もつれなくはあたら桜の名にもこそたて

見花

入阿

見るたびに思ふもあやし桜花かゝる色香もあればある世と
 という二首がある。しかしこれらの歌も、桜がなかなか咲かない
 様子が、かえって散ってしまうのが惜しいほどにすばらしい桜の
 価値を高めていると詠んだり、見る度に不思議に思うほど桜の色
 香がすばらしいと詠んだりしており、蘆庵が「桜」を詠む際の「花
 が散る」という情景は詠まれていない。

五、まとめ

蘆庵との同題詠歌では、歌作の着眼点が重複する場合とそうで
 ない場合があるが、全体的に景範が一般的、典型的な表現を用い
 て歌作していた。また、「桜」「花」が散る悲しみに主眼を置く蘆
 庵と、あくまでも季節の到来やその風物を詠むために「桜」を引
 き合いに出す景範の歌風に差異があることがわかった。それらの
 相違が、景範の『蔵山集』撰集基準に対する蘆庵からの猛抗議に
 も繋がることともなったのではないだろうか。

『奉納月次和歌』寛政二―五年の幸栄との同題詠歌の結句や、
 蘆庵との比較を通して、景範の和歌には、歌作の際の句や歌語、
 視点などの選定において堂上派和歌の影響が見られることが特徴
 として挙げられた。京の歌人と積極的に交流した景範は、自身で
 も堂上派の歌風を踏襲して歌作することによって大坂歌壇の発展
 を目指したのでろう。今後、当時の大坂歌壇の状況や他の大坂歌
 人の歌風について、より研究が進められていくことを期待したい。

注

- 注一 多治比郁夫「加藤景範年譜―懷徳堂の歌人」（大阪府立図
 書館『大阪府立図書館紀要』八、一九七二年三月）によれば、
 この年より「加藤景範入門誓盟録付姓名録」が成り、「景
 範没後も加藤家人門者名が書き継がれ、文化十五年までに

一千八人、文政元年から天保九年までに二百四十三人が記される」とある。

注二 以上、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、「懷徳堂事典」（大阪大学出版会）及び注一所掲多治比郁夫「加藤景範年譜―懷徳堂の歌人」を参照した。

注三 管宗次「近世期津守家の歌道―津守国礼と柿葉亭喜始」〔武蔵川女子大学紀要 四九〕、二〇〇一年）。

注四 浅田徹「蔵山集（版本） 翻刻と解題」〔上方文藝研究 第四号〕、二〇〇七年五月）。

注五 引用は『蔵山集』（安永四（一七七五）年奉納、刊行）「作者名居」による。

注六 引用は浅田徹「蔵山集（奉納本） 翻刻と解題」〔上方文藝研究 第三号〕、二〇〇六年五月）による。

注七 以上、『近世人名辞典』（吉川弘文館）を参照した。

注八 浅田徹「蔵山集解題補考―撰集の基盤について」（上方文藝研究会『上方文藝研究第五号』、二〇〇八年五月）。

注九 浅田徹「難蔵山集 翻刻と解題」（上方文藝研究会『上方文藝研究 第六号』、二〇〇九年六月）参照。

注一〇 但し、元々『蔵山集』に提出した蘆庵の歌二十数首は、実際に景範の選定を経て集に入れられた三首を除いて現存していないため、研究に限界があるとも言える。

注一一 引用は管宗次編『和泉書院影印叢刊四六 国雅管窺・和

歌虚詞考』（和泉書院）による。以下、『国雅管窺』の引用は全てこれによる。翻字は筆者による。『国雅管窺』については、管宗次「加藤景範著『国雅管窺』について」〔『懷徳』六〇、一九九一年二月）に、次のように解説されている。

『国雅管窺』は旧派の穩健な説による啓蒙の和歌作法書である。三十一箇条を立てて、例歌をあげたり比喻を用いて初心の人にもわかりやすく、薄冊ながらもよくまとめられている。景範の歌論、歌字の基礎を窺うものであり、近世後期旧派歌人や懷徳堂の歌字をも察せられる資料である。（略）景範没後の享和元年五月に小川屋清右衛門（錦町二丁目）より出願、七月十三日許可、また翌年の享和二年八月には序文二丁増補の申し出と許可がなされている。景範の執筆年時は不詳である。

注一二 引用は住吉大社所蔵『奉納月次和歌』（寛政二―五〔二七九〇―一七九三〕年奉納）及び『六吟百首和歌』（寛政四〔一七九二〕年奉納）による。以下、『奉納月次和歌』『六吟百首和歌』の引用は全てこれによる。翻字は筆者による。

注一三 表中の比較対象として採用した歌集は、景範とほぼ同時代に成立、刊行したものである。また、当時の和歌の流派をできる限り網羅できるように選択した。各歌集の解題については、『新編国歌大観』CD-ROM版に、以下のよ

うに記されている。

新明題和歌集

底本は、半紙本一〇冊の刊本。(略) 総歌数四七〇四首を収載する。巻末の刊記には「宝永七歳」とある。(略) 本書のような、江戸時代の宮廷歌人の撰集は、これ以前に刊行されなかった。(略) 当代の歌人二七〇名の歌、四七〇四首を、一九五八題の歌題に分類配列したものである。

(上野洋三・大谷俊太・久保田啓二)

芳雲集

跋文によれば、武者小路実陰(一六六一〜一七三八)の詠草を、孫の実岳(一七二一〜一七六〇)が編集したもの。享保年間には宮廷歌人の指導的位置にあり、中御門・桜町二代の天皇に対して和歌師範をつとめ、古今伝授を伝えた。

(上野洋三)

為村集

冷泉為村は、冷泉家を再興した為綱の孫で為久の子。正徳二年(一七二二)一月二八日に生まれる。父為久・烏丸光栄・中院通躬等の指導のもとに精進し、近世中期最大の堂上歌人と目される。

(久保田啓二)

鈴屋集

本書は本居宣長の家集で、編年体の歌稿「石上稿」と「自撰歌」による二次にわたったの撰歌を経て、出版も宣長自ら手懸けた。(略) 五巻のうちはじめの三巻は初編として寛政一〇年(一七九八)一月に、次の二巻は第二編として同一一年二月に板本が出来した。

(鈴木淳)

霞関集

広通八一歳の寛政一〇年(一七九八)に撰じ、自身で清書した決定稿を翌一年、その子万彦の助力を得て私家版として刊行したものである。宝暦頃を上限とする約二〇〇人の歌一二八首を収載している。初撰本と再撰本とは、作者一一一人、和歌九六六首が共通するので骨格はほぼ同じと見做してよいが、作者目録の各歌人の略歴注記を見ても、(略) 勢力を駆け始めた賀茂真淵門の古学派は厳しく排除し、(略) その撰集態度をうかがうことができる。

(松野陽一・中村一基)

うけらが花

加藤千陰(一七五三〜一八〇八)は江戸の人。(略) 父枝直は歌人としても名高く、千陰は初め歌をこの父

に学び、のち、父の友人賀茂真淵に入門して村田春海とともに江戸派歌壇の中心人物となった。

(白石良夫)

琴後集

琴後集は、賀茂真淵の門下で加藤千蔭とともに江戸派の領袖と称された村田春海（一七四六―一八一二）の歌文集である。（略）出版の出願は、歌集が文化一〇年（一八一三）閏一月、文集が文化一一年九月になっっている。

(揖斐高)

注一四 木村三太郎「浪華の歌人」（中澤伸弘、鈴木亮編『国学和学研究資料集成 第六卷』クレス出版、二〇〇八年八月）所収。

注一五 注一一所掲菅宗次「加藤景範著『国雅管窺』について」。

注一六 以下、蘆庵詠歌の引用は『新編日本古典文学全集 近世和歌集』（小学館）による。

注一七 いずれも引用は『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店）による。

注一八 注一六所掲『新編日本古典文学全集 近世和歌集』該当歌脚注。

注一九 『六帖詠草』で「桜」を詠んだ歌は四六首あり、「桜」とともに和歌史において重要な位置を占める花である。「梅」

を詠んだ歌三九首を教的に上回る。また、「桜」を詠んだ歌の中には

花の歌

一年の花てふ花をつくしてもさくらにたぐふ色やなからんというものがある。蘆庵が和歌に詠む花として「桜」を特に重視していたことが窺える。

注二〇 注一七に同じ。

注二一 注一七に同じ。

注二二 今回取り上げた三首は『六帖詠草』本文から『新編日本古典文学全集 近世和歌集』に抄出された歌であり、かつ香川景樹が版本『六帖詠草』から抄出した『蘆庵翁六帖詠草摘英』にも掲載された和歌である。蘆庵の歌風を最もよく表した歌であると判断し、取り上げることとする。

（かねこりえ・二〇一二年日本語・日本文学科卒）